

ペンタゴンの驚嘆 地下鉄サリン事件の聖路加国際病院

H17 2. 14

視た方もいるであろうが、9日、NHKのプロジェクトXは平成7年3月20日におきた地下鉄サリン事件における医療の現場、聖路加国際病院取材した「挑戦者たち『地下鉄サリン事件 救急医療チーム 最後の決断』」を放映した。

同年の3月20日、この日、私は偶然にも東京にいた。事件を知ったのは何とその日の午後5時過ぎで発生から9時間も経過した頃で、東京品川の新高輪プリンスホテルから恵比寿ガーデンに向かうタクシーの中だった。都内あちこちが検問で大渋滞になっている、運転手とのその話題の中でのことだった。

この事件では、死者12名を数えたが、実は、そこには諸外国が絶賛した事後処理があった。ペンタゴンからは「地下鉄で毒ガス攻撃を受けて、よくあれだけの被害で済んだ。」「70人～80人の被害が出てもおかしくないのにどうしてあれだけの被害で済んだのか」と日本政府に照会があったという。前内閣調査室佐々淳行氏の後日談だ。

この奇跡の背後には信州大学附属病院の柳沢信夫医師や聖路加国際病院のスタッフの対応があった。

病院に連絡せずとにかく運んでしまおうという救急車の機転、現場を見て「すべての業務を停止して、患者の治療に当たれ」と決断した聖路加国際病院の日野原重明医院長の判断力と度量。余談だが、医院長日野原重明はあのよど号ハイジャック事件の時の乗客の一人だった。聖路加国際病院はキリスト系の病院だから礼拝堂がある。あまりの患者の多さに礼拝堂を診療スペースに転用し軽症者を運んだ。これも医院長の判断。重症患者はICUに入れて治療。しかし、何が原因の症状であるか分からないまま時間だけは経過していく。サリンかもしれないとカンが働いた医師もいた。あの河野さんが疑われた松本サリン事件と結びつけたのだった。

聖路加国際病院救急救命センターの石松医

師は、すべての患者に瞳孔収縮がおこり、謎のけいれんが発生していることに気づく。縮瞳だ。当初、大方の見方は農薬中毒。しかし、農薬を飲まないで、瞳孔収縮が起きるなど聞いたことがない。石松医師もサリンを疑ったが、確信が持てないでいた。

乗客をすべてを避難させてから聖路加国際病院に運びこまれた日比谷線築地駅の地下鉄職員の生命は逼迫していた。心臓停止の前触れである手の痙攣も始まっている。サリンならその解毒剤がないわけではない。だが、見切り発車した場合、その副作用で患者を死に至らしめる場合もある。全医師が石松医師の決断を待っている。しかし、石松医師はg oサインは出さない。

こうした混乱の中、信州大学附属病院の柳沢信夫医師から石松のもとに電話が入る。

柳沢はたまたまスイッチをひねったテレビで東京の地下鉄内に起きた事件の惨状を知る。その被害者の特徴的な症状からサリン中毒に間違いないと判断した。柳沢は、松本サリン事件の指揮をとっていた。それで、その特効薬を含めて直接聖路加国際病院に伝えることにしたのだった。

佐々淳行はこの判断を絶賛する。これを「内科部長の出勤をまって相談していたら、やがては医院長にいき、県衛生課に渡り、厚生省に渡って、聖路加国際病院に情報が届くのは12時頃になっていただろう。その場合は確実に70～80人の死者が出たであろうことは間違いない」。佐々はこう推察する。

危機対応の際の情報伝達に必要なのは、ペーパーレス 早い行動 責任を負う覚悟だ。しかしながら多くの上司は完全な報告(5WIH)を求める。例えば、ハイジャック事件が起これば、「どこで」「犯人は?」「日本人は乗っているか」という具合だ。分かるわけがない。だからまずは第1報でいいのだという。佐々に言わせればそのような上司は人罪(いるだけ罪の人)だと切って捨てる。この存在のために対応が遅れるからだ。

話を戻す。

信州大学附属病院の柳沢信夫医師のこの機転のきいた対応で、聖路加国際の石松医師はサリン中毒だという判断を固めた。ところが、さあ治療という段になったが薬が不足している。紹介された特効薬は2種類。そのうち1種類はオウムが買い占めていた。(佐々淳行談)。もう一つのPAMは、聖路加国際病院にもあったが何しろ特殊な薬のためにせいぜい20人分くらいしか在庫がない。(薬品状況については諸説ある。不足しなかった。警察や自衛隊が後のオウムの強制捜査のためにストックしてあった... etc)

それで、東京中の病院に照会しPAMをかき集めた。在庫があるであろうと思われた名古屋の薬品会社スズケンでも充当できない。それで新幹線を使った。浜松駅で回収し静岡駅で回収し横浜駅で回収してようやくにして230名分のPAMを病院に運びこみ治療体制を整えた。

その聖路加国際病院には、いつのまにか非番や休日の医師も看護婦もかけつけ患者の治療にあたっている。すべて自主的な判断だ。

「すべてを受け入れる。」この院長の判断に石松医師は、「受け入れた以上、それに全力を尽くすのは現場の使命です。」とさらりと述べるが、石松医師のこの言葉は重い。非番で家にいた看護婦はニュースでこの事件を知るや5分で病院に駆けつけたという。

聖路加国際病院をはじめとする関係者の対応は感動的ですからある。世界が絶賛するはずだ。

なぜ、12名の死者で済んだのか？ペンタゴンの関心はこの1点だ。

救急車の機転、日野原院長の決断力、石松医師をはじめ病院スタッフの使命感、それに信州大附属病院の柳沢医師の普遍性に満ちた使命感。残念ながら行政ルートを避けた判断力も的確だった。

昨年の六天の10月26日号に「状況が命令をください」を書いたが、その中で「人づくりのヒント 状況の原則(変化対応力とコミュニケーション)」を紹介したことがあった。

状況の原則が述べるのは3点だ。

まずは文字どおり「状況の原則」で「社長以下すべての組織の構成員は、状況の命令を受けてのみ行動する。という趣旨だ。

二つめは、「使命と状況の共感=ベクトルの一方向への集中」だ。刻々と変わる状況をひとり一人が判断し、自分の役割をよく理解して、「我、今、何を為すべきか」を考えて行動できる組織は、大きな総合力を発揮するのだという。

三つ目は「情報感度」。情報感度とは、出来事・物事の変化、人の心の変化を感じる力のことで、常に目的意識を明確にし、何事にも興味と関心を抱き続けることで磨かれるのだという。

聖路加国際病院の対応の中で、最も強く感じるのは、「使命と状況の共感=ベクトルの一方向への集中」だ。その根っこにあるのは、状況の原則で、「情報感度の敏感な社員は上役の命令を待たないで、直接、状況の命令を聞け」とあるけれども、看護婦が5分で駆けつけた行動にそれが典型的に表れている。どういう状況か、自分は何をすべきか、それがいざという時に発揮できているのである。

信州大学附属病院の柳沢医師の行動には「普遍的な」使命感と私は書いた。柳沢医師のベクトルは人の命に向かっている。人の命を救うために自分が何ができるか、そういう思いがもたらせた直接電話だ。それを「普遍的な」と表した。石松医師も同じだ。「受け入れた以上、それに全力を尽くすのは現場の使命です。」その現場の使命のためにサリンだと確信が持てるまでPAMの使用を控える。もがき苦しんだ時間だったはずだ。柳沢医師から情報を得て、やっと「何もしなければ患者は死ぬ。可能性にかける。」という決断を下す。人の命にこだわり続けてきたのだった。

私は、これらは、たまたま地下鉄サリン事件という舞台があってプロジェクトXがとりあげたために陽の目を見た姿だと思っている。

「医者というものは、人を救うために生きているのであって自分のために生きているのではない。」これは適塾の緒方洪庵が口癖のように語っていたことばだと司馬遼太郎は書いているが(「無名の人」)、柳沢医師や石松医師の言動がこれに重なってくる。私どもの仕事に置き換えたらどうなるのであろうか。「この仕事は何のためにあるのか」「この仕事はなぜ私なのか」、鹿沼東中で退職された

元栃木県校長会長だった角田昭夫氏が職員にこう問うている。

「訓練は保険みたいなもので、1回長い訓練をやったから現場に役立つというのではなくて、毎日少しずつね、そういう基本的なものを何回も積み重ねていって、はじめて現場に生かされるのかなと、例えば百回やって1回現場に生かせればいいのかと思っています。」これは、ホテルニュージャパン火災で決死の消火活動にあたった東京麹町消防署永田町出張所の特別救助隊高野甲子雄のことばだ。

司馬遼太郎の「無名の人」も高野甲子雄のことばも全校集会で「今」を懸命に生きることの大切さを説くのに引いた話であるけれども、教員に向けてもいい話だ。

私ども教員も教員が教員たるゆえんは授業するところにあつて、その授業の中で、何を「魂」にして、つまりは、どういう「ころざし」をもって授業を繰り返すのかということが問われるべきだ。授業にはこの仕事に対する理解と人間としての教員のあり方や専門性や使命感、またはそれらの継続したものが凝縮されている。公開授業はそれらに陽があたった1回で、教員の資質や能力、努力の作品のようなものだ。

地下鉄サリン事件の2日後、3月22日、山梨県の上九一色村のオウムのサティアンに機動隊が強制捜査に入り、容疑者が逮捕された。犯人リストの中には、東京大学、京都大学、筑波大学、早稲田大学などの大学院に進学した研究者や、医師などの、学歴社会の「成功者」であるはずの人たちが、ずらりと並んでいた。

あれから10年。この事件から見てきたものはあまりに犯人たちと聖路加国際病院のスタッフとの間に見えた対称的な人間の姿だった。

後年、江川紹子が遠藤被告に焦点をあてながらオウム裁判を取材しているが、「自分がサリンを作れば、それは使われる。ひとたび使われれば、その結果が、どれほど悲惨で、どれほど悲しみや苦しみに満ちているか、そんな当たり前のことを、彼はほとんど想像することがなかったのだろう。おそるべき想像力の欠如だが、これはオウム信者に共通した

現象でもある。」と述べている。

その一方で、遠藤被告とノーベル賞を受賞した田中耕一氏との比較も試みている。2人の年齢差は1歳。2人とも京都にいた。遠藤は帯広畜産大学で獣医の資格を得た後、京都大学大学院で学び、田中耕一氏は東北大学工学部電気工学科を卒業後、京都の島津製作所で研究生活を業務としていた。

江川レポートの結びは、「科学者の心から「人」への関心が失われる時。そこが、彼個人にとっても、社会にとっても、不幸の始まりだったのではないだろうか。」だ。

この結びは、「学ぶことは生きることだ」として「未来」などで課題としてきた「かわり」に通じないか。

田中耕一氏はノーベル賞を受賞し、一躍時の人となった。しかし、忘れてはならないのは、ノーベル賞を受賞するまでは社会からは一顧だにされなかった人物だということだ。社会や組織は別規準で評価していたということだ。

「地道さ」は評価を受けることも顧みられることもない。しかし、世の中を支えているのは、紛れもなく聖路加国際病院のスタッフのように無名でありながら日常生活の中で使命感をもって職務にあたっている、つまりは社会の一翼を担っている一人一人の「人」であつて、それが民主主義社会の根底をなしているのである。

私どもの指導主事の仕事は、こうした使命感をもって教育活動に打ち込んでいる「無名の人」やその授業、または教育活動に光をあてることであつて、そこにロマンを感じるようではなくては務まるものではないと思うのだが、どうであろうか。

- ・人をゆるせるか否か。それは人間に与えられた試練です。
 - ・いのちは、その最後の瞬間まで自分らしく生きぬくために与えられています。
 - ・習慣。この小さな行動の繰り返しが人生をつくります。
 - ・子供が欲しているのは人生の正解ではなく、悩む自分のそばにいてくれるおとなの存在です。
- 聖路加国際病院長 日野原重明「(続)生き方上手より」